

令和3年度 第1回通級指導運営協議会 議事録

日時：令和3年6月21日

会場：兵庫県民会館「福」

協議1「縦横連携における個に応じた指導の充実に向けて」

障害の受容と権利について

- 高校通級の柱は、アカデミックスキルとソーシャルスキルとアドボカシースキルの3つである。ソーシャルスキルは、既に指導の中で取り組まれている。アカデミックスキルは、学校の授業にどうついていくかではなく、社会に出たときに必要な基本的な読み書き等の力をつけないと情報にアクセスできない。成人の方から読み書きで躓き、サポートを受けられていないことを聞く。自立のためのアカデミックスキルと、アドボカシースキルは権利擁護なので、自分の個別の教育支援計画に本人がどう関わるのか、本人の意思をどう伝えるのかは重要なことである。

- 本人に障害があることを本人に言わないでほしいという保護者の希望があるのは、高校ならではと言える。その前提で特別支援学校はどう協力するかを考えないといけないが、高校生なので、アドボカシースキルにも関わるが「本人に分からないように支援してくれ」を卒業しないといけない。合理的配慮の提供義務も、本人の希望が前提なので、本人が知らない状態で整えていくのは年齢的には限界である。どう本人が自分の権利を守っていくかを考えると、自分の状態の理解は必要である。なので「本人に分からないようにサポートする」ということは、本人にとってプラスにならないということを説明できるとよい。

- 高校生になると支援を受けるとメリットがあることを理解すれば、求めてくれるようには感じる。本人が人とのやり取りで、なぜトラブルになるのかと困っていることに対して支援する中で、その原因が分かると、発達障害という看板がある私どもの相談窓口でも問題なく来てくれる。ただ、それは個人差があり、保護者が継続的に来られ、本人は来ないというケースもある。

- 説得して納得するというものではない。丁寧に時間をかけて、本人の中で理解できるようにしたい。だからこそ通級が貢献できる場所であり、継続して本人と関われる場所である。

- 卒業後に、いきなり発達障害者支援センター等につながるのはハードルが高いが、通級の一つの大事な目標としては必要になってくる。

- 発達の評価が、卒業後の障害者雇用の際に必要なになるので、手帳が必要になるが、学校教育での教育的な支援のためには、発達検査以外の心理

検査等のデータがあるほうが学習プログラムを組める。例えば、学習障害、LDの子どもは、見ただけで分かる子はいない。どこでつまづいているのかをきちんと分析しないと分からない。その上で、「ここがあなたにとって辛いところだったのね」と。そこで、手立てを一緒に考えるというプロセスになる。心理検査、知能検査WAISはどこで受けられるのか。

- 県立特別支援教育センターで、教育相談に向けた発達検査、心理検査を行っている。高校生の相談は、通級関連ではないが、高校生本人や保護者の問合せはある。

校内連携について

- 本校は、特別支援教育コーディネーターを5名配置している。5名は部長兼コーディネーターという立場で、校内連携を円滑にするのが目的である。生徒指導部長は、生徒指導上の問題に対し、特別支援教育コーディネーターである私も特別指導部会に出席を要請し、対象生徒の特性理解と指導・支援について協議をしている。教務部長には、オープンハイスクールや授業等でのUD化について、教職員に呼びかけ、取り組んでいる。進路指導部長からは、職業能力評価の日程調整の依頼を受ける等、コーディネーターの会議というより、立ち話レベルで連携している。

支援の引継ぎについて

- 兵庫県では、平成29年度から、中・高の引継ぎの仕組みについて研究を進め、今は神戸市も含めた市町の中学校の卒業生が、進学先に情報を引き継ぐ仕組みをつくった。取り組み方は、高校によって様々な形態はあるが、連携シートを作り、支援情報を引継ぐ機会を設けている。紙媒体での情報連携はフォーマットがある。具体的に会議等をするかどうかは、高校によって違う。まず紙で情報が届くことによって、中学校に問合せがしやすくなるという報告がある。
- 本校のケースでは、サポートファイル自体がない市町もあり、特別支援学級から上がってくる個別の教育支援計画と、通常学級から上がってくる発達支援ファイルというものもある。サポートファイルを福祉機関で管理している場合は、こちらから、高校卒業時には保護者に返却することを伝えるが、こちらへの情報提供は「検討中」と言われる。中学時から保護者管理にしている市町は、保護者が提出しない限り出てこない。
- 中高連携シートは、県が統一して作成しており、保護者のサイン等があるので、担任等も面談でそのまま話ができる。

- サポートファイルは、厚労省管轄である。乳幼児健診からの支援ファイルを作っている地域と作っていない地域と、その管理の仕方も地域ごとに違う。厚労省管轄なので、こちらではあまりコントロールできない。
- 年度末に広域特別支援連携協議会がある、そちらの情報では、「サポートファイル」、「サポートノート」等、名称は様々である。どの市町も作っているが、管理が行政なのか、保護者なのかは市町によって異なる状況である。基本的にはどの市町も対応はしていると認識している。
- 中学校でも中高連携シートを3年前から活用するようになり、定着してきている。教員の間で、「この子の中高連携シートは？」というような会話が年度末に向けて出てくるようになってきた。中学校の通級指導においても、自立活動の中でどのような力を身につけていくかを保護者や生徒と相談しながら進めている。そのことを高校側に伝えることが、高校卒業後の進学先や就職先での支援の土台になっていくと考え、中高連携シート、個別の教育支援計画等に情報を伝えられるように努めている。

卒業前の指導・支援について

- 本校は、通級を受けている生徒、保護者に、職能評価の見学・相談を授業の一貫として指導することにした。その際に、授業を欠席の扱いにするかどうか等の教務的などころも整備し、生徒や保護者が出て行きやすい方法を進めようとしている。
- 進学についても、療育手帳を持っている生徒が専門学校に進学し、将来を心配していた保護者が、同じ専門学校で手帳を持った学生が障害者枠で就職したという実績があると知り、非常に安心されたという情報が入った。出口で障害者の対応をどうなされているかを積極的に広報している専門学校は多くないが、高校で専門学校への進路指導をするときに、生徒への情報として大事である。
- 大学に進学した生徒が、どこに相談すればよいのかと言い、高校に戻って来るといったケースがあった。高校でも、担当者が年度によっては変わるので、生徒にとっては、担当者が変わると、不安になる。このような生徒が、大学で4年間を過ごして就職する。高校卒業後や大学の卒業後のことも見据えていかないといけない。大学や関係機関と連携をしていかなければいけない。
- 高校段階での横の連携というところで、近年、先生方の意識は変わりつつある。昨年度、大学への引継ぎは、その場に生徒本人も参加できるとよいという意見があった。

- 特別支援学校は、一般就労のノウハウがあり、協力校として役に立つことができる。関係機関と連携しつつ就労に向けて進めており、卒業後のアフターフォローも、参考になるのではないか。進学に関しては、ノウハウはないが、関係機関の知識、連携はノウハウがあるので、情報提供できるのではないかと考える。

高等学校における通級による指導

- 小学校では、学校生活支援教員という名称で通級は定着している。ニーズも年々増え、小学校は裾野を広げていくという役割がある。特別な配慮が必要な児童生徒が通級を継続して利用するためには、所属する学級、学年、学校の支持的風土の醸成と保護者をはじめ、関わる指導者の児童生徒が抱える特性や障害への理解が不可欠である。また、進級するに連れて、通級の効果が表れ、中学校から通級に通わなくてもよくなる事例もある。以上のことを踏まえて、小学校段階から通級制度の理解を促進し、中学校、高校でも、自分からその制度を利用できるようになってほしい。
- 通級は、「あかん子が行くところや」というイメージがあると、アイデンティティの確立の時期に拒否したくなるというのは当たり前のこと。ただ、本県の高校通級指導は、幸いなことに、そういうイメージがついていない。最初に頑張ってくださった西宮香風高校の先生方が、「なりたい自分に近づくために頑張る場所」というポジティブなメッセージを出してくださったのは、兵庫県の財産である。今年度も県全体で通級希望者が70人以上とのことで、これは他の都道府県にはない。周りの子どもたちの差別のない姿勢を育てていくことが一歩前進につながる。

福祉との連携について

- 福祉関係者と高校とのやり取りは、まだ進んでない。我々は、こういう会議にも出ているので情報は持っているが、福祉の関係機関が通級のことを知らない方が多い。卒業後の連携を進めるために、我々も周りの支援機関に通級指導についての情報提供を行っている。今後、卒業生が入ってくる可能性もあることを伝えることが必要である。
- 実践発表の中に、スクールソーシャルワーカーとの連携という報告があったが、教育もスクールソーシャルワーカーが配置され、福祉との連携のパイプが強くなっていくのではないか。
- 就業・生活支援センターの連絡会では、高校を卒業した人の支援に困っているなどの意見が多かった。高校を卒業し、失敗してから来られる人

たちが多い。障害のある生徒が通常の高校を卒業しているため、就業・生活支援センターの職員は高校と連携しなければならないが、学校からの情報はほぼ得られずに支援しなければならない。実践発表では、高校が地域の小・中・高校や関係機関と一緒に連携会議や研修をし、地域の社会資源についての情報交換等もされた状況とのことであった。卒業後の関係機関との連携について視点を当てるならば、どの地域でも同様の取組を行い、双方が役割を知って、就業・生活支援センターは、企業で働くこと、生活面で困ったとき等に相談できる場所であり、働く生活を応援できる場所だということをしっかり伝えてほしい。高校の先生や生徒、保護者は、福祉の情報や障害者雇用の情報を全く知られていないので理解し、動き出すまでに時間がかかる。リーフレットを作るのであれば、早く活用できる状況になってほしい。

- ハローワークは、働きたいと考えている人を素直に応援する所なので、高卒、専門学校卒、大卒のどの段階であってもハローワークを思い出していただきたい。通級の場合では、我々と一緒に社会に出た後のことを考えていけるということを広めていく必要がある。特別支援学校の先生には分かっていただけであるが、それだけ年月をかけて連携を深めている。特別支援学校の先生は、そのノウハウを高校に伝えてほしい。
- 障害や特性がある方が自分を知るということは大切だが、親としては、そういう方たちがいるということを知ることが必要なのではないかと考える。
- 社会の中にある偏見、スティグマを改善する上でも障害理解教育、当事者だけではなく全ての子どもたちに大事になってくる。
- 発達障害のある子どもが一番苦しいのが中学校の時期である。小学校までは、支援が受けられたとしても、高校の進学を目指す時点で、特別支援学級に在籍していることが高校進学にとってハードルになる。教員によっては、高校進学するなら通常学級にいてくださいという指導をされることがある。無理して中学校では通常学級に在籍するという子もある。支援のことをクローズにしたいという希望は、恐らく、出口が詰まっている感がそうさせるのではないかと。私自身も、子どもに一般就労で一般的なお給料で働く人になってほしいという希望がある。オープンにしないで何とかこのまま頑張ったら、クローズのままいけるのではないかと感じる。自分の子は、通常の学級で小・中・高・専門学校まで行ったが、本人のためになっただろうか。早いうちから本人に発達障害のことを伝えて、周りにも周知していたら自己肯定感が下がることなく育てられたかもしれない。いろいろな権利に関するルールや制度が、十

分に理解されていないところがあるので、その辺りはぜひ周知していただけるとよい。

協議 2

小・中・高校における連携による効果的な実践普及啓発リーフレットについて

進路選択について

○最終的には就労が目標である。近い目標は、小から中、中から高、高から専門学校なり大学なりという進学である。入試に合格できるかどうかだけで選択してきた学生は、ドロップアウトすることがある。障害の有無ではなく、偏差値だけで入れるかどうかを選び、より偏差値の高い大学を選択した学生が、入った後こんなはずではなかったとか、自分が学びたいものではなかったという。自分に合う、合わないという視点がない進路選択をすると、大学生であってもドロップアウトする。高校生でも似たようなことがある。単に合格できるかどうかだけではなく、学校の雰囲気、本人に合っているのか、その学科は本当に相性がいいのか、興味・関心に合っているのかも踏まえて、近い目標も考えるとよい。

○油断すると、中学3年生になって急に高校に入る、入れないという話になり、本人に合っている雰囲気なのかをみる余裕もなく点数で進路を決めるということがある。その前に、その学校の雰囲気を見ることや、学ぶ内容について知る機会を設けて考えることが大切である。特に発達障害のある児童生徒は、環境との相性で全く変わる。ドロップアウトするか、すごく適応できるかの影響を受ける。それらを踏まえての進路指導を考えていただくと有り難いと日頃から感じている。

リーフレットの内容等について

○要項には盛りだくさんの内容が書かれているが、二つ折りA4サイズに入るだろうか。事例を丁寧に書いたら1ケースでも足りない。項目を紹介し、詳細はWebで案内する形はどうか。紙媒体に全てを盛り込むと、逆に情報にアクセスしづらいので、カタログみたいにし、詳細はQRコードをつけておくと、ネット上の知りたい情報にとぶという仕方がある。

○小・中・高校の教員が対象なので、非常に幅が広い。6、7歳から18～20歳までの児童生徒の各段階におけるニーズに関連する情報が入っているというイメージがよい。

○連携に特化したものと割り切る方が、使い勝手はよい。一般県民含めて、小学校から高校までの連携については、イメージだけでもよい。詳しくはQRコードを載せ、アクセスしてくださいという形で、文字は少なく、写真を多くし、イメージを示すという点において、A3表裏で十分ではな

いだろうか。

- イメージはすごく大事で、できれば、格好いいお洒落なイメージのものにしていただけるとイメージアップにつながる。
- 限られたスペースなので、例えば、自閉症スペクトラム傾向のA児が小・中・高でどのような指導、支援を受け、成長したかを事例という形で掲載してはどうか。注意欠陥多動性障害や読み書き障害の場合の例でもよい。
- 連携がメインなので、子どもの成長に応じて、小・中・高ではというような、図のようなものをうまく使うとよい。
- 卒業生の声を載せてはどうか。進学、就職や最終的な社会に出たときについて伝えられたら、状況が分かりやすいと考える。

鳥居座長から

- 学校教育から社会に出る、その就労への移行支援をどうするか。リーフレットは、一人の子どもの成長に応じて、小学校では、中学校では、高校では、出口の進学や就労ではと、それぞれの連携における支援を分かりやすく示せるようなリーフレットになるとよいのではないか。
- 発達障害等の様々な困難のある当事者である生徒への支援ももちろんだが、周りの児童生徒への働きかけというのも大事である。本人が自分自身を受け入れるためにも、社会の中にスティグマがあると、セルフスティグマ、自分自身に対するスティグマになっていく。そこが通級指導を行う上では、一つの壁になって出てくる。教職員への働きかけはもちろん、周りの児童生徒への働きかけも大事な取組になってくる。